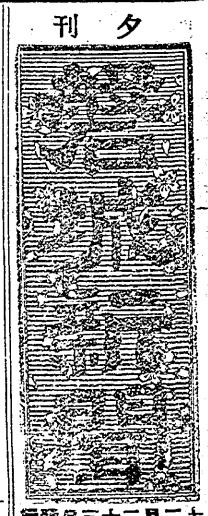
夕刊
十二月二十三日發行
（日曜祭日休刊）
東京振替一〇八・五六五番



師走雜記（下）

島田忠夫

現に、私は生活のため基所に少しばかりの俸給を得る仕事を持つがその執務中に、どうにも書作をしたくて堪まらなくなる事がある。いら〳〵した氣持で帳簿を調べても氣が乗らぬ。そのくせ、だらしもしないから、思に任せ亂暴な口もきくし、より〳〵する私の身に氣づく。

○

大正の末に死んだ天才畫家高間雄子。この婦人と高島雄七氏の令妹で石炭商吉の娘さんであつたが、おゝそれ繪を描きたい衝動が不規則にやつて來たらしい。遺作は凡て、逞しい藝術の衝激であり、たとへて言へば炎のやうな烈しい作品だ。畑の中であくびをかいて寫生してゐたとも言ひ、最後は病中にけぶん、二階から飛んで自ら命を斷つた。兄雄七氏も稀な天才作家でにあるが、筆子さんの方は短命なだけいつそう熱火のやうな仕事をした。

○

この頃私も、新聞雜誌の挿繪、カットなどをかなり描く。あるものは二日、あるものは三日。多くて五日の猶豫は得られぬ。短い期限で構想を練る暇などない。わづかに寫生帳を繰つたり、近くの戸山ケ原へ寫生帳を片手に出かけたりする位だ。これは實に苦。二三日前もある雜誌の挿繪を十四五頁描いたが、十月の鳥取方面の寫生旅行がかなり助かつたこれも二日で描いた。

自身の衝動で描く繪は、はあるか自分の仕事の買はれることは心に沁みて添けないと感謝の念が湧く。之れは、挿繪なども同じ理でつた。

ある筈なのに、後者の方に、餘計に感激するのは畫ぬどふものの『吾儘性』に基分の力倆の貧しさを知り沈み切ることもあり、割合に現一得て無情に喜ぶ時もある。悲喜交々至るわけだが、傍の家人の方が見てゐ堪まねらしい。

依頼の挿繪などの方は割合に金になり、衝動で描くが、何かしら注文やら、不滿やらが湧かう……。

山兎——私は、上越の雪山などを今宵想つてゐる。

わが子

小笠原文夫

○學校へ行く子と連れて朝をゆく墓の霜じむ冬となりたり

○學校へ行く子と連れてうらたのし寒くなきやと肩ぶたきつゝ

○靴下もオーバも着けず學校の方針守りて子は一圖なれ

○家出でて電車みちにて別れたり小走りにゆく子の脚あはれ

○途中まで子と連れだちぬ幼くて父に添ひつつわれも然りき

（昭和一三）

天氣豫報

小名濱側後所製側

今晩　北の風晴後曇

明日　南の風同

新年文藝募集

時局に因めるもの制限なし

12月24日
△蘭經吉野山を落つ（文政元）△町内の帶刀を禁ず（明治三）△杭州占領（昭和一二）△第七十四議會召集さる（同一三）

12月25日
△キリスト降誕（西紀前四）△大正を昭和と改元す（昭和元）△監禁の蔣介石洛陽に拘還（昭和一一）△新京で國境建設會議開催さる（同一三）

12月26日
△第七十四議會開院式△支那事變第七回論功行賞發表（昭和一三）

贈山田東亞醫科大學主事

珠雲　小野務平

志望遠大操心堅
夙握殖民先取權
更策善鄰開校序
醫人醫國賴君全

振袖横町

須藤鐘一

（105）　荻原萬象畫

浪人召抱へ（三）

○

盞すぎとなりて日あたる緣先の牡丹の冬芽皮をかむれり　赤彦

講談

音羽と呼びて突き出しの道中姿は、金吾の心を一攫みに採り取つたのも尤もであつた。

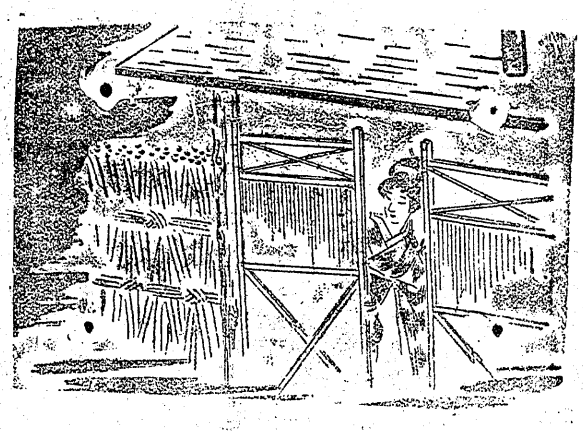
此女には見どころありと、樓主大はやみにはづみ、この一夜は此の道の女の一大事と、入費の莫大なるは此樓の前例なきほどに奮發したのであつた。

恍惚として魂を天外に飛ばして眺め入る金吾を同僚はほゝ笑ましい氣に眺めて

『坪井氏！』

と聲を掛ける。

『えつ！』



我に返つて振り向くと

『さすがの石部金吉殿もお氣に入つたと見えまするな……』

『いや、なに——』

返答も、しどろもどろに顏を眞赤にして答ふ。

『おつはつは！さう辨解なさらぬでもよろしいではないか。相手は生娘ではござらぬ。お氣に入つたなればお取持を致さう——。それまで、まづ一騷ぎだ！』

遊び馴れた同僚の音頭で座敷はまた賑やかになる。

その間に、今の道中姿の花魁は何處の抱ねかと聞くと、幸ひなことには、一同の馴染の店玉屋の抱ねと知れ、坪井氏をお取持ちせよ——。

『やれ〳〵玉屋の抱ねか、それは殘念なことをした。身共の相手を申しつけるのであつたに。』

『あれまあ小林さまの浮氣なこと——。お馴染深き瀧川さんのございますのに、そんなことを仰有ると、瀧川さんに告げますよ。』

『冗談ぢや〳〵。お内儀、早速玉屋にまゐり、音羽をはなれれど、今宵の客は年坪井氏に出すやうに話して若く然も美麗な若侍、それまゐれ。話が決まれば直ぐに初めな客で、皆からから送り込んでもらふからなアかはれてゐるのを見ると、ひとしほのいちらしさが增

『畏まりました。では直ぐして、間に合せて見ませう——。暫らくお待ち下さいませ。』りませう。』

『内儀さん、上々の返事でございます。今宵はまだお客が定まつてゐないとのことでございます。お待ち受けしますとの御返事で、へつ、へつ——。』

『御苦勞でしたね——。皆様、今お聞きの通りでございます。サア、お送り致しませう——』

一同は、八幡屋の者に送られて玉屋へと赴いた。

金吾は、かうした場所には始めてではあり、光り輝くやうな音羽に眼の前に座られたので、どうして好いやら勝手がわからない、たゞもぢ〳〵してゐるばかり。

今日の連れは、大身の旗本の二男坊、三男坊、皆それ〳〵に遊び盡した者ばかり。

それ〳〵、坪井氏をお取持ちせよ——。どうだ二人を並べると光源氏の君と小野小町を並べたやうではないか』

『いよう、御兩人！』

そんなことを仰有ると、瀧川さんに告げますよ。』

『冗談ぢや〳〵。お内儀、早速玉屋にまゐり、音羽をはなれれど、今宵の客は年坪井氏に出すやうに話して若く然も美麗な若侍、それまゐれ。話が決まれば直ぐに初めな客で、皆からから送り込んでもらふからなアかはれてゐるのを見ると、ひとしほのいちらしさが增

『さあ、主さんお部屋に參

と、金吾の手を取つて一

座をはづす、音羽を金吾の初心なところにあをひかれ一心を盡して持て成しで、果してこの眞實が金吾の骨隨に徹しもう金吾は宇頂天になつてしまつた。

うれしさ、おもしろさ、今は死ねども恨みなしと思ふ程である。

開院
內科、小兒科
正木醫院
六丁目（五丁目交番隣）
醫學博士　正木信功
電話四三九番
入院隨意
看護婦至急募集

日記及年賀はがき類は用紙不足の折とも不拘豊富に取揃へましたが賣切ませんうちに御買上願ます
昭和拾五年度新日記
當用日記・ポケット日記
特種日記……百數十種
新年繪はがき・年賀はがき
——年賀用特種私製はがき——
花がるた・トランプ・百人一首
◇ますます喜びつゝ一點一袋間慰◇
平市四町目（電話二二四番 三三四番）
マルトモ　柴田書店

御婚禮御着附
パーマネント　ウエーブ
洋和結髮　オゾン美顏術
御婚禮のかつらを御利用下さい
御染髮洗毛
美爪術電話六七八營業所 五二五自宅
平市　水野化粧院

只今入荷
金鵄印
天然バター
金鵄ミルクの北海道札幌工場製の天然バターです。
天然バター品薄の折柄是非御用命下さい
1/2 ポンド　1/4 ポンド詰
西村屋藥局
電話3番

加奈陀系銀狐、純血エゾ狸
東北系多産種狸、フイッチ日本テン
大型種兎アンゴラ兎、雉子家禽各種
平產業養狸組合事務所
乾產業會社畜產部
國策アンゴラ兎採毛協會
福島縣磐城種畜場
內郷村境（平市外）
出張所　平駅前　電六四八番
分讓所　東京市淀橋區下落合
◇藥品榮養料飼種各種◇
北里研究所製
◇ジステンバー豫防液
東亞製藥所製
綜合ビタミン劑
◇ヴイベリン末（動物わかもとの稱あり）
◇フイッシミール榮養魚粉
病理研究、診療
榮養劑の配劑
飼育指導の需に應
擔任技師　獸醫師

おでん
お酒のあとに
おけさめし
平市三田小路（三丁目裏）
おでん
茶めし
酒の家
味郷

國は二ッポン・魚は凍魚
日本水產特約
卸賣　平製氷社會
（電三八・三六）
ヒラマル凍魚
平代理店四丁目
印魚問屋
電五二八番
タイ　ヒ
白エ　甘鯛
冷カツフコ　魚ビ
帆立貝柱
ウニ貝燒
鯉マナ
配達ハ一尾一箱ヨリ迅速ニ致マス。

お醫油は……ヤマフル
味噌醬油
たひら正宗
鰹節　食品料
塩屋
山崎合名會社
福島縣平市
電話（營業部一〇番 本店二七番）
明治生命磐城代理店　山崎與三郎

移轉廣告
今般左記へ新築移轉致候間御通知申上候
昭和十四年四月
平市南町十四番地（警察署通り角）
（舊診療所　平市六丁目）
木村外科醫院
木村淳
電話三〇九番
外科一般
內臟外科
性病科
肛門病科
◎入院應需

おでん
たつた揚
やきとり
一平
電話二六三番

◇和文歐文タイプライター
◇最新事務用品類
◇文房具一式
◇製圖並に測量用品
◇謄寫版並に附屬品
平市田町銀座
店理代ータイプライタ邦東
所成養トスピイタ邦東
森藤
電話三七〇番
振替仙臺五一〇番
（藤森事務用器商會）

新車のお知らせ
斷然!!! 乘心地良い!!!
最新型フオード
入車いたしました。
是非！御試乘の程を！
市內四丁目
スヾキタクシー
電二一七番

診療間
夜診
胃腸病
內科
胃腸病科
花柳病科
性病科
皮膚科
專門
（見習看護婦募集）
松村醫院
（平市南町電一〇七番）

床下から銀貨七百圓

福神刻みの老人が生前蓄へた！

事變下に逃走の貯金朗話

惠比須大黑の彫刻でお馴染の内郷村大字小島の眞柄正三さん（六十二歳）を一期として此程亡くなつた。しつかりした何人かの子女に侍び迎へられ都度各方面からづかれる何不自由無き身をら贈られた志は、好きな酒趣味の一刀に福神を刻んで代を除いては、子孫の爲めは第の向いた家に奉祀させ丹念に蓄へたものらしく過額を定めぬ金一對處か、場般の衛生掃除で條の下から合によつては只でも惡い顏端なくも各種銀貨をギツシをせぬ無慾恬淡振りに、何リと詰めた之も翁の手に成よりの嗜好物たる酒を友にる本の壺を發見した。其の年金生活の裕かな晩年を送り乍ら、曾ては日露役に傷いた勇士として、若ければ今でも！と肉の歎を洩らしてゐるが、輝かしい興亞の春を目の前に、無常迅速の風に誘はれたのである

『笑顏の良いお爺さん』と して其の崩るる樣な福神の笑がほと共に各家庭から歡に感激『俥二人まで節線へ送つてゐるのに申譯ありません』と陸海軍へ各五百圓を献金した

が作品五十點、興亞の春に着想したもの其他見るべきもの少くない

盲生が慰問袋

磐城市役所に寄託、係員を感激させた

前非を悔ひ 一千圓寄附

川内の河原義衛氏

木炭闇取引で平署に檢擧された双葉郡川内村木炭生産販賣河原義衛さんは同署土屋部長から懇々諭されたのに感激『俥二人まで節線へ送つてゐるのに申譯ありません』と陸海軍へ各五百圓を献金した

送炭 反對現象

珍しく鐵道向が增した

今中旬の發送統計

近來飛躍的增送の一途を辿つて來た常磐炭界は師走中旬に於て些かビッチに變調で前年同期より前者十一車を來し、而も一般事業方面を減じ千四百九十九瓲增、より鐵道用が增したと云ふ後者は稀有にも三百三十車逆現象を見せた三千百七十五瓲を增し合計

自十一日至二十日發送高（事業用）五、九二九車七四瓲の增である（上中旬通七、二〇七瓲（鐵道用）一計增一、一三九車一四、七、六七〇車二〇、一五九瓲七九瓲）

合計七、五九九車九七、三六六瓲

バタ類の値段協定

燃料不足の折柄一般家庭から重寶がられてゐる『バタ類』の値だんがきのふ平署に集つた石城木箱及製材工業組合員によつて左の如く協定された

△木挽屑南京袋一個（七斗入）工場渡一十五錢

△バタ木＝一尺長さの三尺東一（耳摺東）一把卸す一錢七厘、小賣十三錢

（バタ）卸十三錢五厘、小賣十五錢

△耳摺＝六尺長さの七尺東＝七十錢（バタ）六尺長さの三尺東八十錢

ゆく年を憶ふ

市内の行事暦

二

五月二日　小川村にて白井家法要

四日　仙台鑛山監督局平支所竣功式

五日　磐中開校記念運動會

八日　高橋警察部長歡迎晩餐會

十四日　谷口にて伍藤三段古稀祝賀園遊會

十六日　平商校庭にて体操

廿五日　蓮沼本社長本縣代表中支皇軍慰問使として出發

廿六日　同上東京驛出發

廿八日　同上長崎出帆

七月一日　同上南京着

二日　中島飛行機重役吉田四郎氏逝去

四日　蓮沼本社長漢口着

七日　事變第二週年、夜公會堂で野崎市會議長歡演會

十三日　平署の賭博檢擧相つぐ

十七日　防空演習本格第一回